

平成25年3月



ボランティア研修会に24区から778人が参加

令和2年度



コロナ禍の食事サービス
左上：令和2年4月号(東成区)
右上：7月号(港区)下：8月号(港区)

活動が始まったところもあるそうです。
活動が流動的な今、実は転換期の真っ只中なのかもしれません。ここで選ぶ道が、それぞれの地域の「アフターコロナの食事」へとつながっていくでしょう。

この日は、竹村安子さん(大阪市中
央公会堂で「大阪市高齢者食事サービスボランティア研修会」が開催されました。大阪市の高齢者食事サービス(ふれあい型)は、全国に先駆けて昭和47年から始まった活動ですが、平成24年度の市政改革プランで見直し(区ごとに再構築)となり、これが市域で最後の研修会となりました。

このコーナーでは、市社協設立70周年を記念して、60周年(平成23年度)から70周年(令和3年度)の10年間について、テーマを掲げてふりかえり、今後は展望します。

高齢者食事サービス 時代は変われど、活動は続く

阪市立大学非常勤講師 ※当時)の講演に続き、港区八幡屋地域、浪速区日東地域、東成区東中本地域が活動を報告。竹村さんは「活動を取り巻く状況は厳しいけれど、是非今までのつながりを大切にし、活動を続けていただきたい」とエールを送り、参加者からは「やる気をなくしかけていたが思いを新たにしたい」との感想も寄せられました。

それから8年。
食事はサービス、通称「食サ」は、住民同士の見守りやふれあいを生み出す活動として継続されてきました。
令和2年以降、コロナ禍でストップしたままの地域もあるなど、大きな打撃を受けていますが、「配食を絶えず継続」「会食から配食に切替え」「感染対策を講じて会食を実施」など、ボランティアの底力を感じさせる活動も。その力の源は「そこに楽しみに待っていてくれる人(〇〇さん)がいるから」。補助金制度や生活様式が変わっても、その思いは変わりません。
また、これまで食事サービスがなかった地域で、コロナ禍で新たに、「月1回、配食・テイクアウトを組み合わせて実施し、そのまま会館での食事も可能」という形で活動が始まったところもあるそうです。